

編 集 後 記

「胃と腸」5 巻 4 号をおとどけする。消化器関係の主要学会が 1 カ月早く終了したので、今年は久方ぶりにゆっくりと春を満喫できるかもしれない。毎年、学会シーズンになると、前の号を読み終らないうちに次の号がとどいたりして、机の上にきれいな雑誌が重なりがちであるが、この雑誌だけは隅々まで読んで、すぐ明日の診療に生かしてゆきたいと思っている。

本号では胆嚢・胆管造影法に主焦点がおかれている。松本、窪田、大藤、和賀井の各先生は、いずれの方も、この領域のパイオニアとしてながい苦労を重ねられた方々で、たいへんすぐれた論文で、格調も高い。良い論文は緒言から生々していて、それに魅了されてずっと最後まで読ませるだけの力をもっているものだ。春の学会で白壁教授、穴沢助教授司会の「膵胆系の臨床検査法」というシンポジウムが行なわれた一方、近藤教授、芦沢教授司会の「十二指腸の内視鏡」では内視鏡的膵胆管造影法の成長ぶりが披露されたあとだけに印象深いと思う。

空にはジャンボが飛びまわり、やがて S S T 時代がこようとしている。しかし、音の壁を突破したあとには熱の壁が待ち構えているといわれる。人間は当初は到底解決不能と思えるような難問にも真正面から取り組んで、いつの間にか克服してきた。技術を飛躍させるためには新人の台頭が必要だ。その点でも本誌がはたしつある役割の大きいことを痛感する。

<竹 本 忠 良>

<編集> 早 期 胃 癌 研 究 会